

Research Material : the basic principle of The Daijosai rite by Orikuchi Shinobu

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 高雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1405

資料 折口信夫

「大嘗祭の本義」(小池元男ノート) 昭和三年 (下)

伊藤 高雄編

〔凡例〕

- ・本資料は、国文学者・民俗学者、折口信夫(釈迢空)が昭和三年度に長野県東筑摩郡教育会中央部支会にて行った講演を、学生で門弟の小池元男氏が筆記・整理したノートである。
- ・資料の解題は、國學院大學栃木短期大学國文學會の『野州國文學』第八十六号(平成二十五年三月)及び『國學院雜誌』第一一四卷第十号(平成二十五年十月)に報告しているので、そちらを参照していただきたい。
- ・本号に翻刻する資料は、前号(本紀要第8号)に続くもので、ノート番号6の残り、ノート番号33である。ノート番号6については、前号を参照願いたい、ノート番号33は前号発表の後、「大嘗祭の本義」の末尾の部分と判明し、ここに載せることができた。ノート番号33は表紙の両側に片や「折口信夫先生 徳川時代文學史 散文・律文 信州・和田小學校」、片や「萬葉集 折口信夫先生 小池元男」と題された六十六頁分のノートである。そのはじめ三頁分がノート番号6に続く内容で、ノート番号35・6と同じブラックのペン書きである。
- ・表記は、原則として漢字は常用漢字とし、古典的仮名遣いとしたが、場合によっては正字を用いたところもある。また、翻刻の整理に際しては、読解の便を考えて、省略字体や文中・文末表現を若干整えた場合がある。翻字不明の箇所は、□とした。
- ・本翻刻に際しては、伊藤が翻刻を行い、元武蔵野大学助手の加藤歌子氏、國學院大學大学院生の柏木義樹氏(現神奈川県立相模田名高等学校教諭)、同じく百瀬頭永君、多賀谷蓮君、國學院大學学生の早坂尊晟君が加わって読合せをした後、伊藤が整理した。
- ・なお、前号及び本号と関連する論考として、拙稿「折口信夫「大嘗祭の本義」講演の実際―小池元男ノートとの比較から―」(『國學院大學紀要』第59巻、令和三年二月発行予定)がある。参照願いたい。

大嘗祭の本義（小池ノート6・33）

本郷小学校（昭和三年七月一日）三日 東筑摩郡教育会中央部支会

第四 斎場

今の話の引き続きで、大嘗祭の時の斎場、宮廷の門を守ることより話す。

物部は、固有名詞と普通名詞とあり、やそもの、ふと云はれるものが、うんと沢山あつた。その中の主なものが、物部氏。広くは、門部も皆物部に入る。魂を追ひ退ける職は、皆物部である。何故かと云ふと、大和の国の魂を取り扱つたから、その家のみが代表者となつた。大嘗祭の時、物部の仕事が大切。物部の本筋は亡びて、分れが榮へた。石上である。大嘗祭の時には、石上氏が主として宮廷の三方の宮門を固め、大嘗宮の南北の門を固める。門には、物部は楯を立てる。堅楯で、外敵をとどめる。この時、梓も立てる。一門、二枚づ、立てる。宮廷も。皆で十枚、その事が、万葉卷一、元明天皇の時の歌、

ますらをのゆぎの音すなり、もの、ふの大まへつぎみ楯立つらしも（卷一の七六）

これに対して、姉の御名部皇女のよまれた歌、

わがおほきみものなおもほし すめかみのつぎて給へる吾なけなくに（同、七七）

これは何故かと云ふと、大抵はこの歌を、自分の国は騒しい。東国が騒がしいから武士が戦争の訓練してゐる。騒がしい事だと、自分の徳の少なきを嘆かれたと云ふてゐる。しかし、これ

は、大嘗祭の時に物部が楯を立てる習慣あり。で、武士のゆぎの音がする。丁度、もの、ふの大臣等が楯を立ててゐるに違ひない。大嘗祭の日の御即興。姉の歌が変だから、前歌を誤る。

「あなた、考へる要はない。あなたは尊い神が、順次に従つてお立てになつた。あなたでなくはないのに。今度、おほきみとなつた方だから心配する要はない。」と云ふのである。大嘗の時に楯立てることあり。即位・大嘗に楯を立てるのは、そんな時には、殊に魂が来て妨ぐのを武士が防ぐ。唱へ事を唱へ、楯を立て、矛を振つて、追払ふ。他に似た例あり。昔は、即位の時に四方の関を固めてゐる。奈良も京都も。鈴鹿、不破、愛発の関等の。実用はわからんが、即位の時に人を遣して、防がした。又はゆふつけ鳥をして、関の神の心を和らげに行つたのである。即位のはじめに事があると、関の神に守つてくれと云つたのである。後にも逢坂の関へ上げてゐる。野生の鶏が居らなくなつても、ゆふつけどりなど云ふ。三関を固めるのは、都の近い山の通路を固めて、越え来る不思議なものを止めさせ、宮殿の門のそばにも置いて、妨害者の入らぬ様にした。

ところが、この大嘗宮の話になつて来るが、大嘗宮とは、如何なる意味のものか。造り方は、柴垣の中に、悠紀・主基殿あり。南北に門あり。悠紀を天子濟ませて主基へ。悠紀・主基殿とは何か。悠紀が主で、主基は第二。だから、ゆきは次であるときされてゐる。すく・すき・しく。ゆは、いむのゆだとまでわかるが、何故にきか不明。二つ造つたのも不明。

大体、大嘗行事を見ると、日本全国を二分して、その代表者に

二国を定め、二つ国からすべての品物を持ち来させて、天子が二殿でお祭りをなさる。もつと昔は、悠紀・主基殿に似たものが、宮廷領の国々の数だけ出来たものであるらしい。先づ天子、宮廷領の国々の数だけ殿が出来、米すべての材料を持参して祭りをする。そこへ天子来る。それが、混乱が生じて、天子が、そこで復活の式をおやりになると云ふ方法が加はつたのではなからうかと思ふ。

御蔭を設けるのは、何時かの混乱ではないか。二ヶ所、悠紀・主基でなさる要はない。大嘗宮の他に、天子が天子の資格をつける殿が別になければならぬ。悠紀・主基に天子来るのは新嘗をお受けになるため。後には、天子が籠る御殿を忘れて、悠紀・主基を用ゐるに至る。

今も廻立殿あり。天子の物忌みの御殿であつたと思ふ。この儀式を悠紀・主基でやつて、二度繰り返すと説くのが本当だと思ふ。

悠紀・主基の話をとめて、風俗と語部の話をする。

悠紀・主基の国から風俗歌が奉らる。もとは、平安朝にはその国の古歌を用ゐた。その国より古く出た歌人の歌、後世は都の歌人が代理す。

風俗歌は短歌形式である。悠紀の国、主基の国の役割をもつて来た人の労働歌と考へてゐるが、古くは風俗とは、古くくにふり、国風と同じ意味となる。ふりは、国々の歌ではわからん。

これは、たまふりに関係あり。たまふりの舞歌にかけて云ふ詞である。それが分れて、近世は、ふりは舞ふ意味となる。ふり

は、全くたまふり。たまふりの詞が、国風の歌。宮廷にもたまふりあり。諸国にもある。それを天子の大嘗の際に奉つて、天子の寿を祝福する。中臣の寿詞の百臣の魂を奉ると同様、諸国の魂をつけるのが国風の歌を奏する理由である。奏すると、魂が天子につく。もとは国の稲の魂を歌ひながら附す。大嘗祭には、稲の魂をつける歌が国ふり。広くは、あらゆる国の魂をつける歌。

この、たまふりの歌を始終天子に申し上げて、宮廷の中に残つたのが、ふりと称せられるもの。皆、国風より出たもの。記紀にあるのは、短い長歌の形。大嘗祭の国風歌は短歌。奈良、平安、短歌形。国風の歌の出は寿言と同様、国々の寿詞中の詞が分出したもの。つまり、長い歌の中に、そのえつせんすとなつてゐる部分がある。物語中に神の本当の詞あり。全体と同効果を表すと信じられた。

記の断片的の物語の中心は歌で、歌のみで効果を表す、全体のわれ／＼が遡る限りは、悠紀・主基の風俗が奉られるが、一方、大嘗祭の別の方面を見ると、大嘗祭の卯の日の行事の中に語部が出て、諸国の物語りを奏する。この事は少なくとも七ヶ国から風俗歌がかつて奏上せられた証拠となる。後世では悠紀・主基二国となつてゐるが。

午后

語部の話になる。大嘗、卯の日の儀式にあらかじめ召された諸国の語部。

美濃八人 丹波二人 但馬七人

因幡から三人 出雲四人 淡路から二人

これが、先づ平安の百年程経つた頃の大嘗祭に出た語部の数。果たして昔からこれだけか。或は、これらの国が特別に大嘗祭に関係あつて出て来たとする考へもある。その国々を調べて見ると、色んな意味が出て来るが、私は、この形を最も古いものとは思はれん。ある時期にかく決まり、延喜式にさう定つたのである。理由はつぐが、危険だと思ふ。多くの国々より出たのが、ある時代に固定した。語部が出なくなつたか、代表せしめたか。かく云ふ大きな儀式は、何年か一度であるからして、年月経るために一代前の例をおふこと多い。前代かくしたからかくす。故にこの式がある時代にあつて、それが固定した。無理に理由つけば但馬、因幡は、出石人―漢人種―の中の語部に丹波・丹後は大和民族の一部。襖ぎと関係あり。古代飛鳥以前は、后をす、めること多し。出雲国は、出雲人の出るところ。淡路は大和民族の一根拠。美濃は不明。結局、こんな理屈をつけるのは、いけない。自然な方法で説かねばならぬ。昔からでなしに、ある時代のものが前例となつた。

語部の職の一方面は歌の本を語る。歌を歌ふて、歌の起こりを証明する役である。大嘗祭の歌の起こりを説く仕事をする。大嘗祭の歌について、その歌の歴史がある。出処は物語より脱落して、世に行はれ、この歌は全体と同じ効果あり。舞を舞ふ。つまりふりが行はれると、その歌の本縁を語り、由来の長いことを証明する。歌の説明である。語部の仕事のために、一方国ぶりの歌、舞ひがなければ、大嘗祭の語部の価値なし。前の七ヶ国の語部は、国ぶりの行はれた時代のあつた事を説明してゐる。その七ヶ国の国風の歌が奉られなくつても、語部のみ出て、風俗は悠紀・主基のみ。故に先に国の数に拘泥するのは悪いと云つたのが確かになる。この意味の語部は、語部の末で、後には出なくなり、鎌倉・室町には、語部の文句もわからなくなる。それで、大嘗祭の語部はそれだけにして風俗へ。

国風の歌が諸国より奉られ、その中に代表者が決つて来る。国風には意味がある。国が定まる理あらうが、わからん。たゞ国風中、一種特別なのが東の国風の東歌。大嘗祭に東歌が奏せられること伝はらず。大嘗祭は、国家にとつて古典的の行事である。昔は、やらねばならない生活の古典に過ぎなく、日本国家成立後、生活の古典となり、意味がわからなくなること早し。

東の国が日本にならぬ中に、生活の古典となつたから、東の国風が大嘗祭に出ない。新附の蕃人は、皆大嘗祭に来る。隼人、国栖等が来て、歌を奏す。つまり国に対して、蕃人のふりあり。東は、それに入らんほど古代日本にとつて、新しい国であつた。少くとも、平安になつてすぐに、東国の歌が何かの時に奉られ

たに違ひない。平安朝のみならず万葉にも古今にも東歌あり。その後、七八十年、東遊の歌が固定す。舞を主とす。歌は客体。この三者は東の国風で、東人が誓ふ法式があつたに違ひない。新式故に、大嘗祭には加らず。

東国のふりの入つたのは、ほゞ目当つく。荷前の初荷を持つて来る時に、宮廷に服従を誓ふた。時期が違ふ。荷前を持ち来る頃に行ふ事であつた。古い国風の中から七国の国風が唱へられ、語部が離れた。その後、国風は、悠紀・主基の国よりのみ奉られた。風俗は、悠紀・主基、旧い日本の属国のみならず、ごく新しい東より異つた場合に奉られたことは思はれる。諸国にすべて行はれた国風は、物語より落ちたもの。その歌を中心とした説話が發達した。こんな歌を多く知ることが大切な事である。身を守り、富を増し、健康を保つもとであるが、これが歌物語發達の導きである。貴族が覚へねばならぬ歌を書いて、貴族の子弟に読ませた。それが、大きな平安の物語となる。ところが、平安の初め頃からの風俗は、主として悠紀・主基のもので一番注意を引き、いつも悠紀・主基の役員が繰り返す場合が多かつたためである。これに限らん証拠は、東遊の一部と信じられる風俗歌は、東の国が主として、残つてゐる。風俗は悠紀・主基のみならず、新しい東の国の歌にも風俗と云ふ。

さて、悠紀・主基の国では、少なくとも、稻穂を中心として、総ての行事が行はれてゐた。稻穂は、ほとんど神の扱ひを受けてゐる。徳川時代、茶壺等を大名行列してゐるのは、一種の魂神を運ぶ習はしが続いたもの。悠紀・主基の主な人は、酒に関

した人のみ。男女の役員あれど、女の方は、造酒子サカヅコを一人定める。郡の長官、郡領の女である。最高の巫女である。郡は、もとの国の広さで、郡領は国の造である。国造は、最高の神職で政權もあつた。男の方は、稻実の君が一人選ばれる。酒と米とが定まる。根本的に日本では、酒と米との間に区別がなく、米の一変態としてゐた。女の方では、造酒子サカヅコの下に酒波人、こなふるひ篩粉一人、共造二人、多米酒波一人、これだけ酒にあづかる巫女が出来る。男の方は、稻実の他に、灰焼一人、採薪四人、この他に、男女歌人二十人、歌女二十人、これ位が悠紀・主基で撰ばれ、その他、沢山の人が出て来る。これらの人間がさかつこ、さかなみ等云ふても、必ずしも酒の事のみでなく、斧入れるのがさかつこの役である、と云ふ風にする。時期来ると、稲を積んで都へ上り、土地を撰んで、在京の齋場ヤシカを作ると、稲は北野に後には作る。大嘗祭の前に、大嘗宮へ運んで来る。結局、それらの人々が稲の魂を守つて来て、酒にし、米にして、天子の身に入れるまでの間を守護する。

稲の魂は、神の考へが生ずる以前のマナーである。外来魂で、これがつくと、農業司の権と健康を得る。天子にとつては内部のものであるとともに大切のもの、故に大嘗宮の稲は入れるのにも警蹕の声をかける。貴い神でなければかけない。天子でも尊い社等ではかけない。貴い神が来たしるし。宮廷では天子の時、をしくと云ふ。家々・国々で違ふのである。この声で、どこかの何かわかつた。貴人が来たから悪者のけと云ふ警蹕を稲の入る時にかける。物質ではなく稲の魂である。稲魂いなみたまと日本式

に云ふ。うかはうけの熟語をつける形。とようけのうけで、召し上がりものの意で、酒の方に近いことばである。ともかく、稲の魂をうかのみたまと云ふてゐる。だから警蹕の声をかける。大嘗祭行事の大部分は稲と天子との関係である。で、その悠紀殿・主基殿の行事に入る。

悠紀殿・主基殿が二国になつたのは、何時の頃か不明である。近代は、亀卜で定めたが、昔は何か他の方法らしい。延喜式でも国々の名前の幣につけて来るのを選ぶ様であるらしい。それを国郡卜定と云ふ。さて、その悠紀国・主基国と云ふのは、大体、畿内（語弊あり）、つまり朝廷の勢力及ぶ中で、最も天子のゐる大和に近い国々の中で選ばれるやうである。その国は考へてみると、悠紀殿は東、主基殿は西に。

悠紀等に関するものは悠紀左、主基右で、後になる。それで考へると天子の勢力の及ぶ国々の中でも、殊に大和を中心としてや、広がりかけた頃の畿内の地方へ及んだ位の時代に定つた。私は、悠紀とは天孫人種の向ふ方角の前にあたり、主基は後に位する方と考へてゐる。つまり前後両面を選んだ。前方と後方を選んで代表を定めた。必ずしも神の意に叶つたのでなく、国々の代表となるに過ぎないと思ふ。まだよくわからんが、悠紀とは行く、主基は過ぎと仮定してゐる。事実には於ても大体悠紀・主基の有様は悠紀は大和の東南、主基は北西となつてゐる。この悠紀・主基の国の定らない前は、国々から新嘗屋を沢山造つて、これを天子が廻つて歩かれた。それが二つに固定したのである。

この悠紀殿・主基殿は一つの垣内にあり、間に目隠しあるに過ぎない。これも簡略な形で後世の立部を立て東西に殿あり。柴垣フシカキであり、南北に門あり。椎の若枝をさす。それが昔より云ふ青柴垣であると思ふ。ふしとはどの木と定つてゐない。柴とふしとは同じと見てもよく、一種の木の枝を用ゐる時の物質名詞がふし。その木の枝に青いものが挿してあるのが青柴垣。その意味は何か。その地に悠紀・主基殿を建てるのは、黒木を用ゐる。今の考へは常識である。黒木とは昔より京の八瀬の里より宮中へ奉られ、貴族の家を造り、後には売られた。黒木は竈で燻して、木を焼く。これが八瀬の職業である。ともかく一種の神秘な山の神人の奉る木であつた。これに青柴垣を取り廻した。何故かと云ふと、記の中に垂仁の子、ほむちわけの皇子、記紀に伝記あれど、系図中なし。さほひめの子である。物を云はないで……「黒木の橋を作り、飯宮を造りてまさしめき。名はきひさつみ、青葉……この川下に、青葉の山なせるは山と見えて山にあらず、けだし出雲……」ほむちわけの皇子は、出雲で肥の川の中に飯宮を造られた。国造のきひさつみが青葉の山で家を作つた。御馳走せんとして、家を作つたのである。青葉が山のやうだが山ではない。あしはらのしこをの神、大國主の神主（古事記中巻）……これは、神を迎へる時に青葉を山と立て、目じるしにして神を迎へて御馳走をする。尊い皇子の話として、こゝに残つてゐる。おそらく柴垣に椎の若枝を挿すのは、神迎への形で、この神は天つ神にも天子にも見える（後述）。

この青い山が大嘗宮では垣になつてゐるが北野の斎場では標の

山になつてもつて立てられた。平安では専らひを^と用ゐられたらしい。歌にひを^のやまとしてゐる。京の人は発音不完全で拗音出ず。これを標とするのは式の時の控へ場所のしるしをひ^をと云ふ。やはり古くはしめやまと云つたのであるのが、平安にひ^をとなつた。神の占めるしるしの山である。しるしを見せる山で神のしめ山である。それを平安にはひ^をの山と云ひ、北野の悠紀・主基の一つ立ち、齋場に引いて来る。神、ひ^をの山に乗せて、悠紀殿・主基殿に送る。神の目じるしで、ひ^をの山は、この後どうなるか、不明。この標の山の形が古来より近世まで残つてゐる。必ずしも標の山が近世の風を生んだのではないが、近世の祭の屋台、やま、青山様は、ひ^をの山の簡単な形で、青葉を失つて来た形である。

記でも標山の原形があらはれてゐるのだが、常にも用ゐたと思ふが、大嘗に特に注目された。一番盛んに用ゐられたのが祇園会である。夏祭の元は祇園会で、これが栄へて、夏の祭りの起りとなる。夏祭りは、田植のさなぶり。田の神を振舞する祭が、夏祭りである。ところが、それが次第に農村の行事でなくなつたのは家々郡等の祭りでなくなつてから。奈良の頃より怨霊の祟り（道教）を考へられて来た。御霊様の信仰が進んだ。京は殊に盛んで、五ヶ所の御霊をまつつて、御霊会を行ひ、神を慰めて悪事をとゞめ、遂にこれを抑へる神を考へた。即ち牛頭天王——平安、道教は仏僧が多くとり扱つてゐる經典中の仏教の天部の神の名をとつて来て、日本にない神の名前にした。これもそれで、祇園様で日本式には須佐之男の命とした。すざ

のをは田の神であるから、牛頭と一緒になつた。これが怨霊を抑へる力あり。怨霊を抑へるために祇園会をする。この時、山を出し、山を中心として祭りを行つた。次第に祭りに山榊が行はれるに至つた。主として夏祭り。

第三日 九時

今日は第五御慶と書いてあるところ。御禊と云ふ。天子の禊ぎに關した話。

大嘗祭の用意として十一月は全体物忌み月として散齋と云ひ、大嘗祭の前日二日と大嘗祭の日を致齋と云ふ。前者、自由なれど穢れ、神事上のもつれた問題に与^あからぬ。しかし、昔は一日位致齋をしたのが、令の規定以来軽くなる。十月末日が選ばれて山背京では賀茂川のある点で禊ぎをする。それを御禊と云ふ。これと同じことが伊勢の齋宮・賀茂の齋院が齋内親王になられる時に予め御禊をする。それから見ると神主の職をするために予め禊ぎをすること、なる。齋宮、院、天皇の禊ぎは同格である。古くは禊ぎならん。

禊ぎと祓への区別。

祓へとは穢れ、或は慎むべき事を犯し、触れた場合にそれを贖ふために所有物を提供して罪を払ふ祭りをする。後世、禊ぎの代物とされるが、さうではない。祓ひの神事に神に供へる物を提供する。神はこれを受けて罪なきものと見てくれる。これを祓へと云ふ。神事にあづかる人が、他動的の意味で。

禊ぎはさうではない。後世は身の穢れた時に行ふのだと云ふ事

実。伊邪那岐の命が黄泉の国で穢れ、日向の阿波岐原で禊ぎをしたと。この話も禊ぎと祓への混乱後のもの。禊ぎは神事に与る用意に身を浄める。神を迎へる為に家を禊ぎし、家人は神にお目にかゝれるやうに、又あづからぬ人は海川で禊ぎをして、慎んでゐる。後の神道で吉事祓へ・凶事祓へと云ふが吉事祓へはない。良い事を待つためにみそぐのは禊ぎで、吉事を考へてゐる。祓へは、穢れ、悪い事をした時に云ふ。後には刑罰、又は禊ぎを祓除と云ふ。しかしこれは禊ぎの事である。

宮廷で大祓するのは実は御禊である。平安朝ですでに誤り、奈良の頃に（聖武）すでに混合す。

大祓で祓へるべき罪——神に対して慎むべきこと——、天つ罪とは天上の罪——須佐之男が犯したからこの国でも慎む——国つ罪中に穢れつきがあるが、さうでないもの例へば、高つ鳥、這ふ虫の災ひ、等云ふ。高つ鳥、高つ神の災ひは天の鳥や神が入つて来た時の慎しみ。鳥や蛇の出ることはこの家が神の家になつたしるし。内地で喜ぶのはこれ。沖繩では三日間家を出て、禊ぎをしてゐる。後には一日になり、やらなくもなる。先年那覇の若者（ずり）が死んだのを見て、ずりの人々が騒いで、浜下りをして禊ぎをしてゐる。それは穢れであるが、もとは神の来るしるし。しらひと、こくみ。こくみは背虫と云ふが、国つ罪となつてゐ、これが出来るといけないと云ふてゐるが実は、そんな人を神に供へてゐる。この人は神の占領した人で神人となるべき人で、それをみそがして神に供す。奈良にすでに禊ぎと祓へを一にして皆慎しみと考へてゐる。祓へは贖罪として祭

の費用を出す行事。禊ぎは吉事の方で、良いものを待ちかまへる為で美しくする。日本では唱へ言をすれば古家が新しくなる。新嘗の新室を一言唱へて新室と信じた。そのことが大嘗祭、新嘗祭にも行はれ、これでなくとも神今食——古米を食べる——の時にも行つてゐる。それを宮廷では大殿祭と云つて新室ほかひと言はぬ。神今食、新嘗、大殿祭は大嘗祭にも行はる。これは大抵祭り（御飯を食べる祭りの）の行はれる日の夜明方に仮装した人々が宮殿を清めて廻つて出て行く。その後、祭りが始まる。新しい神が来ると天子が神と共に食する仕事になつてゐる。神祭りは振る舞ひの行事が中心で、その前に天子の居る処を新室にして歩く。大殿祭と云ふ。

大嘗祭では悠紀・主基殿の出来ると同時にする。平常の大殿祭おほほのほひの間に天子は湯殿に入つて身を清めてゐる。禊ぎをしてゐる。そして後に御殿で祭りが行はれる。神祭りに予め出て来る人は、御殿を清めに来るだけ。平安の考へで云ふと山人と称する山の神に仕へる神人。もとは山の神であつて清めてくれる。その後へ客人神が来て天子と共に御飯を食べた。それ等の人が云ふことばを延喜式では大殿祭祝詞と云ふ。

ほかひは祝福するもの。詞と云ふ事。大殿を祝福することば。同時に動作も大殿祭。大殿祭、——祝詞と云つてゐるが、平安では日本神道はわからん。

大殿祭は祝詞でなく、護詞又は鎮護詞と書いて、いはひごとと云ふ。天子の云ふのが祝詞。上へ下より云ふのが寿詞。神の代理者が家の精霊に云ふことば。山人神が土地の精霊の代表者で、

家の精霊を抑へる力あり。それに云ふて聞かせて行く。中間のものが部下のものに云ふ形。「俺はかうした方にいひつけられて、かう云ふからして守つてくれ」と云ふ式の土地精霊の代表者山の神が目下の家屋の精霊に云ひ聞かせる詞を、いはひごとと云ふ。大殿祭はこれ。祝詞に非ず。いはひごとを云ふのは招かれる神でなく、家を新しくして廻る。その後、本式の祭が始まる。

その間、天子はお湯を召す。大嘗祭では、大殿祭が早く出てゐるから卯の日には出てこないが、お湯のことはしきりに行はる。大嘗宮は紫宸殿の前に出来、紫宸殿の南に。東には廻立殿が作らる。その外から大嘗宮まで廊下様のものが出来てゐる。もとは土のたゝきであつたであらう。廻立殿は、悠紀・主基殿に行く前の用意の場。紫宸殿は常の御殿で、廻立殿は祭にお籠りになる御殿で、その殿の名前は何故ついたか不明。三間南北、東西五間の殿。その中、西半分を天子の居られる処とし、東の方の残りは竹の簀にしてある。そこが茶の湯どころで、意味のあるところで、神秘的なことで詳しい行事はわからない。むしろ悠紀・主基の方が、神秘に私には考へられるが、大嘗宮の方はわかるが、廻立殿の御儀はわからない。天子は卯の日の式、辰の日の式の中に始終廻立殿にかへつて、湯をつかはれる。おもて立つたのは三度で、その用法は不明である。

湯とは温いものかどうか疑問。湯は斎イハヒであるから、この湯に運ぶが不自然である。この間に斎イハヒふ川水ありて、天子がお清めになる川は、使ふ水を汲むところ。人間の用水がすべて川、

井泉、池、清水。斎イハヒふ川は禊ぎの用水と云ふ事。斎川水が次第に変化して来て、次第にゆと云ふ事になる。かく見れば運びは自然。ゆかはは水でよい。

日本の信仰では、初春にある国から温い水が、水の出るところへ共通に出るとした思想からして、いづるゆ、いでゆが多く、神秘的なものとされた。常世の国より地下を通つて来た温い水を尊重した。でなくともゆかはの水は温いと信じた。次第にゆかは水にはぬるいものを用ゐた。これが湯の起り。古くゆとあつても湯か否かわからん事多し。藤原、奈良に天子等が温泉を求めて旅行するのは禊ぎをするのである。こんな関係から宮廷のゆかは水がぬる水即ち湯が用ゐられるに至つた。湯は禊ぎの水でこれに入ると神人になる。湯に入ると、神である。日本の伝説では、天より来た天つ乙女が湯に入つたのが人間となつたと云ふ話が段々あるが、天の羽衣をとると人間になると考へられた。この話のものは天の真名井の七人の天つ乙女の話である。この乙女が後に外宮の豊受大神となつた。この縁で但馬から八乙女が宮廷にも伊勢へも出た。禊ぎを奉仕する人。昔は古代のある時期までは且波氏の人が后になる習慣あり。その後には且波氏の人の形をとつて后となること、なる。すると八処女の話と且波氏と関係がある。神秘的話となる。注意。

天の真名井の話では羽衣をとつて人間になつたとするのは後の考へで本当は神にならねばならぬと考へる。

吾々の時代まで二百年位前には湯殿へは湯具ふんどしを締めて入つた。昔は風呂へ行つて二本持つて行つたのである。湯具を

締め換へて湯に入る。何故かと云ふと今から云へば隠し所を見せない為と云ふが、これは合理解である。けれども、吾々のやうに下帯を汚れるものでつけてゐるのが間違ひ。上では毎日かへる。下帯は人に見せない為でなく物忌みの衣である。物忌みをどうするか不明。女の方は解らない。民間の風俗では極く近頃まで男がふどしするのが男の資格を得る。十五で若衆となり、若衆宿へ挨拶に行く。これを袴着と云ふ。女の方では裳着と云ふ。ところが正式には男女、袴着は二度づゝある。赤ん坊で、人間ともわからん頃から村の子供になる間に七八才一度。この式が平安貴族でやかましい。も一つ一人前の男、乙女になる時に、も一度する。我々は二度せねばならなかつた。貴族は若く一度、民間では年入つてと考へてゐるがもとは二度。お宮参りして村の子供となる。この子供の頃は道祖神へ仕へる資格を得、二度目に産神に仕へる。こゝで男・処女といふ。ゆもじ、ふんどしをするのが、男になつたしるしと考へるが誤り。ふんどしはその前提で若者となるときだけである。物忌みの衣であつて、いつもふんどししてゐるのではない。その時期の間、局部を結び上げる。これを今の吾々は解くが昔の人は解かない。結び目に神秘がある。結び目は神秘である。小谷口碑集に馬の耳にかける紐の結び目の事を記してゐる。昔は女でなければわからない結び方があつた。昔はこの時には生殖器を用ゐない禁慾生活である。

守る。それを取り放つて、はじめて神になる力を持つ。神となる以前にふんどしをつけてゐる。神になると性慾自由になる。そして女の家へ自由に入りに出入りして契りを結ぶ。それまでの衣でそれを解くのが水の中、湯の中である。天子は湯の中で使ふ衣三様あり。一は天の羽衣、浴衣とされてゐるがさうではない。なみぎぬ（波衣）、——姿を隠す衣。その他も一つあり。天の羽衣は湯の中で介添への女がお取り申すとはじめて本当の神におなりになる。その話をせねばならぬ。昔より湯の信仰が考へられてゐないが、考へると不思議な事多し。湯殿腹と云ふ子供が大分あつて重んじてゐる。もとは神聖味あり。垢搔きの女に子どもが出来る。これは、さうなるのが当り前だと云ふ信仰あり。それは大昔、産湯を尊い皇子にする時、皇子を取り上げる大湯坐、若湯坐と云ふ。乳母には、四つあり。大湯坐・若湯坐・飯嚼・乳母がある。生れた子のために子を豪族に付託する。この家を壬生氏と云ひ、壬生部と云ふ団体を壬生氏に宰領させる。たとへば反正天皇の時の話。□□の丹比が壬生となつて丹比の壬生氏と云ひ、丹比の壬生部を宰領した。後には御名代部と云ふ。生れた時、これを定めて、その氏より前記四つの女を撰び、高いものを大若湯坐として産湯を扱はせる。これは湯の中の子どもを据ゑ申すことで、考へて見ると、たゞ人がするのでなく、水の中に居る女神が出て来て子供を養ふ法式をする。その証拠には入部と読ませてゐる。これは水の中へ潜る仕事をするからである。入はかづくである。水の女神として覗ぎの水をつかは

せる。第一回の禊ぎで、同時に産湯である。丹比氏では氏の主が壬生の天つ神の寿詞を産湯を使ふ中に唱へた。

ところが、天子が、毎年復活の式をするが、毎年産湯を用ふ。大湯坐は年取つてゐるが若湯坐は若い。事実を見ると大湯坐は今の天子の後、若湯坐は育て、ゐる皇子の后となる傾きあり。飛鳥以前の後は尊い家の禊ぎの職を奉仕する人である。丹波氏は禊ぎを司つた家で、宮廷、伊勢へ八処女を出す。この八処女が五節の舞姫に関係がある（後述）。

日本の古代の詞に天つ罪と云ふ事がある。大祓祝詞中にあり。須佐之男の命の犯した罪が此国にも伝つてゐる。農事の罪で神より天子に委託した農を妨げるのが天つ罪。罪と云ふ事は新しい罪悪観念に入り過ぎてゐる。天つ罪の語源は他にある筈。万葉では、雨障・霖禁（忌）と書いてゐる。万葉時代には意味が変化してゐて雨に籠つてゐるのは物忌みに家に籠つて外出出来ないのは同じだと比喩的に解かれやすい。

あまつ、み常する君は久方の昨日の雨に懲りにけむかも

（巻四の五一九）

いつも雨づ、みしてゐる貴方は昨日の雨で外出出来ず懲りたらうと。

私はこれは男女禁慾生活の歌と思ふ。この他にも応神天皇の時に、后を呼ばれると御子とくつ、く。天子そこで「長目を経しめたまふ」。普通、めは男女会ふ機会で、その間を経ることをいふと。しかしこのながめもながめいみと関係あり。平安にながむを用ゐてゐる。ぽかんとしてゐる。眺ると連ねて考へてゐ

るが、実はほうつとしてゐることで平安文学に出る。

おきもせで寝もせで夜をあかしては春のものとてながめくらしつ

このながめは何か皆関連ありと思ふ。私は、天つ罪とは天上の罪ではなしに、天上で須佐之男の命の犯した贖ひの罪と云ふてゐるのがをかしい。私は天つ罪の考へが固定してから国つ罪が出来た。天つ罪の本義は、今でも田植に夫婦が共寝しない。徳川時代にはこんなことがうんとある。随筆大成の十二巻の中に、この例が。何かと云ふと丁度その頃が一年中の雨降りの時で、田植の時で、この時には村の男女は神事関係となる。男は神で女は巫女、後には神。

女は四月のはじめ山籠もりして成女戒を得て、つ、じの花をかざして帰つて来て苗代に立てる。これが田植の早乙女となる。田植の神事にあづかる巫女の資格で、田植の終るまで乙女の生活をする。男女とは、神事にあづかる男女で生れ代るものと云ふ事。をつは生れかはる *mono* が語根でことなる。乙女は三種あり。本当の乙女、永久に乙女となつたもの、後家さんでなくても年が二十を過ぎると床去りをする。それ以上夫婦であるのはいけなかつた。上流では皆やつた。たまに愛情深いときは出来ないが三十になると女は離れやうとして神となる。後世の男慮してお室様の時代となる。徳川時代の大名騒動はこゝに起因する。平安には仏に帰す。一種の乙女になるのである。も一つは夫婦でありながら乙女の生活をする人。マリアが乙女の生活したと云ふので皆早乙女。田植が済むまで男をふれず、男の方

も田植前後女にふれない。今も残つてゐる。さんさい(散斎カ)の形で男も女も、裳袴に印をつけて会はない。だから、ながめをふると、云ふ。長雨の時期を経過する。応神天皇は姫を性慾的の苦しみをさせたのである。兒見ながら長雨中女をほつて居る。それがながめをへしめたのである。それが固定してながめとなり、動詞となつて性慾的の憂鬱からほんやりしてゐる。平安には清々しくなつてゐるが根本は性慾的の憂鬱。

さつきの物忌みが、あまづ、み——つ、むはつ、しむの語根。その天づ、みが天つ罪を作つた。五月の田植のつ、しみがあまづ、み。日本では須佐之男の命が田の神で陰陽道で牛頭天王。もつと古くは武塔天神と云ふ天部の神の名を須佐之男につけた。悪い方の農耕神である。それを祭つて守つてもらつたので、須佐之男が田の神となつた。須佐之男に対するつ、しみが、雨の時のつ、しみがあまづ、みだと考へた。須佐之男を怒らせる事は出来ないと思つた。

田植の時のみは神が出て来る。他の時は夜でなくては出ない。だから夏祭の神事の中心は昼である。田の行事でも田を離しに来る。植ゑつけ中、後世ははじめと終わりに離し、田が定まるはやしだと云ふ。後には林田等の姓も出来た。後には最初のみで終はることがある。神が仮装して来る。それが田舞を生む。これが猿楽と合体するのが田楽である。女は兒を隠してゐる。これは神の形である。本来は巫女。夜は田の神が作つてゐるのである。さつきの間は神が外を廻つてゐるから男女合せず。さなぶりの時から神が自由になつて男女の語ひをする。そして男

となる。これは近世の形あらんことは、物忌み嚴重。しかし、こゝに誤解あり。神事がはじまれば物忌みがない。播磨風土記には一人の植女を凌してほとを切つて了つた事などがあつた。ながめいみは、だから田植以前のこと。それが田植が済むまでやると考へた。丁度ふんどしするのが男の資格だと考へると同じ。本当は、資格を得る用意として。

ふんどしはふもだし(——馬のほだしとなる。馬の体につけてゐるもの——)だとする。物忌みの一種の衣類である。このたぶさくは股をふさぐから云ふと云つてゐるが実は着物を前へはしよるのである。中間、小者の風である。袴を猿股のやうにしてゐる。これがたぶさくである。袴が長くなつてからからげのを云ふ。一種の猿股類。私は男のふもだしと云ふものを制御してゐる着物だと思ふ。故に神になれば取らねばならぬ。事実宮廷でも湯の中でとられて情慾が解放せらる。

大湯坐、若湯坐が御子を育てる。その中に産湯で御子の着物をとりさけてゐる中に御子が成人して先づ触るのは若湯坐である。大湯坐は父帝に仕へる。本当の例は垂仁の後、佐保姫が稲城で焼け、死ぬ時、

なが結ひをきしみづのをひもを誰かも解かむ。

ひもを宣長は直ぐ情慾的に考へてゐるが、今ほど露骨に感じなかつた。神秘なひもである。天子が物忌みに居つた時であつたから問はれたので佐保姫は且波の道主の女を二人五人す、めてゐる。この時分丹比氏の乙女が后になる根源を説いてゐる。これまで佐保姫であつた。

官長は夫婦だから緒を解いて寝るのは誰だと問ふてゐるのだとしてゐるが、野蕃時代ほどそんなことを嫌つた。結び目の解き方を知つてゐるのは且波の道主の貴(女神)の女である。天の真名井の女神なり。ひもの結びを解くと本当の神となる。その第一の行事は今解いた女に会はれることで生長した。若みこは斎川水でひもを解いた女をその場で妻とする。それが若湯坐が后になる風で、その風習が奈良・平安に忘れられ、乳母がお世話をして若い乳母——即ち子守が育てた方の妻となる。証拠は、うがやふきあへずのみことは玉依比売と夫婦、めのと——妻の弟と云ふ事——を乳母であると學者は云ふ。めのとが妻になるのである。そんな関係で一系は伝はる。皆水神の女又は水神の信仰を保つてゐる女、わかる限りでは丹波氏の女である。

世が進むと丹波氏の形をとつて后となる。それが變化して来て藤原が禊ぎを司る事となる。例へば、允恭天皇の愛人衣通姫は、天皇の後、中皇女の妹である。中皇女も水を天皇に進めた人、その妹は若湯坐である。それが天皇の愛人になつてゐる。それから宮廷の水を掌るのが藤原氏となつた。中臣の分れである。何故藤原と称したかと云ふと宮廷の生命、つまり天子の瑞のひもを解く女を出す職業をした。それを中臣女と後まで云つてゐる。藤原氏が撰ぶ。その話有力な例は光明皇后がはじめて藤家から后となつた。聖武帝弁解して臣下から后が出てゐる。仲哀帝の後は葛城の女で、人臣の女を后としてゐると云つてゐる。弁明の要なし。藤原氏は水を司る人である。

藤原氏の勢力のもとには瑞の小紐を解いたから水つまり天子の産

湯の儀式の時に、御湯殿は常にも重んぜられ日記あり。平安より近世まで断片的に残つてゐる。女の文章、後には女がよくばりとなつて貰つた事のみを書いてゐる。日記は天子の言行を記すのである。殿上の日記とは、湯殿に内侍がゐる天子の言行を書いたのである。湯桁、湯棚は神祕の行事の行はれる所らしい。そこに天子の瑞のをひもを解く女が入つて行つた。古くから湯の中の儀式はその意で、天の羽衣はふもだして、これを解いて性慾を解放してはじめて自由の神となる。神となつてからは、穢れの問題にならぬ。

第一回は紫宸殿の附近であると思ふ。正式には廻立殿で二度行つた。平安には行はれなかつたであらうが、昔はあつたのである。この問題は天の羽衣に関係あり。それが天人の話の天の羽衣と同じもの。飛行の衣となるのは話が逆になつたのである。天の羽衣を脱がせるのが八咫女のすべき仕事であつた。必ずそんな女は一人でなく何人かある。正確に八人でなく、皆天子がお触れになる。中にはかへしてふ事もあつた。天の羽衣中に間違つたものあり。廻立殿より大嘗宮へ行く時の廊の切れを羽衣と云ふが誤りである。後から巻いて行く。大嘗宮へ入る前に立つものが警蹕をかけて行く。をしくと云ふ。そこから天子を天のをし神と云ふ。天子の仮の号である。それは天の羽衣でない。はごもと云ふものであらう。葉筵は式にも見えてゐる。天子の通りになるところに敷いて、天子のあとから巻いて了ふ。神祕を失ふことを恐れて。今いふのは誤り。

そして悠紀・主基に行かれるが度々入湯、廻立殿に入る前に一

度、廻立殿に入つて、悠紀へ一度、主基へ行かれて又一度、非常に湯殿行事は考へれば神祕をけがすやうだが日本の皇后の出る根本をなすので后はみな水の神の女で御子を神にする仕事をす。神の内は女に行ふこと事実。
長忌みは、田植以前の慎しみである。

今度は直会。

直会は語源からなほりあひと云ふが私は、字は当てたものでなほるをなほらふ、から出た名詞、なほりと云ふ事だと思ふ。

なほるとは今では座をかへることを云ふが一番もとは食物と関係あり。大嘗祭の卯の日の行事の悠紀・主基殿の天子の食事の中に十人の女が出て来る。延喜式には十姫十男と書く。十姫は采女で特別の仕事をもつ。その中に最姫・次姫と云ふものあり。天子のそばで介添へをする。

この十姫が飯囓、乳母と関係あり。天の羽衣の式に参加するものと考へてゐる。最姫・次姫は天子の食事の中、まじなひの詞を唱へる。「なほびたまへ……」と云ふ。「答ありとも直びたまへ……」と云ふのである。よく唱へ事に間違ひありとも食物には間違ひないように。直日神は古は占ひの神である。呪詞・呪言が間違ふとその通りの効果を出すのを禍日の神と云ふ。文句になくとも間違つた事を云ふと禍が来る。これを矯正してくれる神が直日神で占ひの神と後になる。一方、御食を上りになる時に唱へ事をする。その時になほびたまへと云ふ。食事することが一番大切である。最姫の唱へ言が大切でそれから、なほ

ぶ詞自身が天子の御飯と関係をもつて来る。一体日本の行事は何でも二度繰り返す。悠紀・主基の御殿の行事もこの思想も本義に加つてゐるかも知れない。直す考へがあるのかもしれない。確かに同じ事を繰り返す。天子が食事するのをなほびたまへと云ふのを考へると一度食して座を替へても一度自由な態度で召上る。それがなほひの式で豊かにくつろいだ式で、その時に出る神を直日の神と又云ふ。平安のは直日命は宴会の神、遊芸の神となつてゐる。くだけた宴、楽しみを司る神と云ふ事になる。も一つ、古今二十の巻に大直日歌あり。厳重な式後ののうらひを行ふ時に歌つた歌である。宴席上に大直日の神が来て嚴肅な形をやはらげてくれると見てゐる。

古今のは替へ歌。

直日はもと意味が違つた神であつたが後にはゆつたりした宴の神、遊芸の神で、後にうづめの神と一緒にされる。これは誤りなほらひの席を定る神がなほびの神だと云ふ風習を生じてゐる。

午后一時より

大嘗祭に於けるなほらひは、辰の日の後の巳の日と丑の日である。この日の朝辰の時に天子悠紀殿へ。そこで食事し、それが済むと大和舞を奏す。

この時に五位以上の者が饗応がある。六位以下の官人共が入つて行き、その人等が、悠紀・主基に関係ない他地方の風俗の舞をする——当時の流行の舞——主として武官の舞だと思ふ。午後の未の時にになると主基の御殿へ。そこで田舞が行はれる。そ

の他、五位以上の役人に御馳走あり。六位以下舞ふ。こゝで第一日の大饗が行はれる。同じことを二度、これが直らひの第一日。ところがこれらの大嘗祭に奉仕する大忌・小忌と云ふものあり。小忌とは王族中の撰定せられし人、ならびに神事に直接にあづかる人、神事に幾分遠い高位の人が大忌と云ふ。天子はじめ高級官吏なり。もとはもつと神事にあたらねばならぬが細事は小忌の仕事。したがつて大忌の方は物忌みゆるい。今でも小忌衣は伝つてゐる。次第に変化してゐるが小忌衣の模様は伝つてゐる。例へば、社々の神事にあづかる人の衣が能役者の上に残つてゐる。小忌衣の風をうつしてゐる。これらの人々が第二日午の日の行事後物忌み解除となる。

舞姫の舞は昔は第四日午の日に行はれた。申の時、行はれた。大体精進落としになつて了つた時。なほらひは、精進落としの儀式で、精進が仏教上の式と結んで魚を食べぬことになつたが、もとは禁慾生活、物忌みの生活を精進といふ。なほらひを巳の日に行ふと精進落としが半分済んでゐる。桶洗ひ、そうぞく洗ひ、後宴等とあり。なほまだ神が居られる。後世は祭が済むと神はゐないとするが、昔は祭の後にもゆたかな気分で宴席にのぞんでくだけた饗応を受ける。巳の日と午の日の行事が肆宴と古語で云ふ。酒飲んで兒赤きを云ふと。しかしわからん。肆宴の中に神の帰る時期、満足させて帰す時が出来る。大嘗祭の神はどの人が不明。おそらく天子が神を招く。主と同時に客でもある。神主である。神の仕事と同時に神そのものにもなる役であるから極点はわからん。結局一人二役、他の家々で云ふと新

嘗祭の時には主人より格の上の人を招いて客とする。昔の形は、尊い神が臨んで来るのであつた。崩れて来て、新嘗すると正座の客を作るために尊い人に来て貰ふ。神が来るから新室の宴をした。今度はにひむろの宴のために客を迎へる。

例へば允恭帝の大中皇命の時に天子は客として迎へられた。この時は客と主となるがあるじは御馳走と云ふ事で、客人にあるじをする人であるから主となる。中皇命が帝を迎へ、もてなしをしてなほらひの場合に移つてから舞姫を出した。ところが舞の後にそとほりひめをお求めになつた。

その舞姫を誰がするかと云ふと、第一次の供饌の時にご飯を奉る役をした人、その人がなほらひの御ものをすゝめる時に舞姫になるのが正式らしい。十姫が宮廷の舞姫となるのである。ところが困ることは客人も主も天子である。これだけは祭の形式が変化しても大切であるから代はる事が出来ない。天子が二代するのは辰の日と巳・午の日も同じ。舞姫を召すのは天子の仕事。この舞姫を五節の舞姫と云ふ。これは五節の舞を舞ふからして五節舞と云ふたのではなからうか。天子の寿を祝福する舞である。宮廷の夏冬の大祓への時に天子の身長を竹で計る。これを節折と云ふ。

竹で繰り返し返して幾度も天子の身を計る。一度に二度行ふ。天子の魂に、平安までの信仰では、荒世の魂と和世の魂とある。和世の御衣と荒世の御衣とを作る。だから魂が二つあるから身を二つある。そのために二度指して、和世の御衣と荒世の御衣に


魂をつける。そして節折の祭にあづかつた役人に与へる。この五節の舞も実は天子の御身の寸法をさしたものでなからうかと思はれる。それを五度繰り返した。五節折をした。その為に五節の舞と云ひ、五節の舞姫が出たのだと思ふ。その証拠は平安にわからなくなつてゐるが午の日の申の時、——四時頃——まづ大歌を奏し、五節を舞ふ。その時に、神服女カシハトリメの舞が四人の女によつて行はれる。これがつまり、衣物、を扱ふ女の舞で、これが二分して後には神服舞と五節舞とになつた。もとは一つであつた。一は、四人になり、五節のも行はれた。一方は節折を行ひ、一方はまればとをもてなす舞姫の舞。前日まで供饌にあづかつた人の舞。この二様の事はもとは一つ事で供饌にあづかつた人が衣をすゝめて節折もし、舞も舞つた。舞は魂ふりの行事でその他に意味なし。五節舞も神服女の舞も同じで正式には八人であつたと思ふ。それが後に変化する。五節の舞姫の仕へるところを五節帳台——ねどこ——の試が行はれる。後世きれいになつてゐるが、允恭帝のこゝを見ると舞姫が天子の試をした。婚姻の早い習しは早くからある。帳台を調べるのは天子が五節舞の姫を女にする調べである。平安にはすでに行はれなくなつたが、舞姫は騒がれてゐる。

その後悠紀・主基の名残に国風の奏楽がある。悠紀の国司が歌人、歌女を引き連れて、悠紀・主基殿で悠紀・主基の風俗歌を奏する。その後斎を落とすところの解斎舞（古くはトシ乞ノマヒと云ふたのであらう。）をする。するともうこれで終りで神が皆あられ散る形になる。祭事にあづかつた中臣、斎部の役人

小忌の人たちが酒をいたゞく。普通はこれをのほらひと考へる。なほらひはまだ厳肅。それが柏の葉——柏は酒や御飯を盛る木の葉である。色んな種類あり。この時は夜である——をかづらとして頭に被つて舞ふ。これで大嘗祭が終つて皆、小忌は小忌、大忌は大忌で脱服して散会。これは祭に臨んだ小神の散会する式。小忌・大忌の男は神で女の方は神の世話する人。いよく祭が済むと踊り狂つて分れて行く形である。一体、宴会の意味を云ふと、前述した如く二度の食事出て、最後の食事の時、あるじ側より舞人出で、同時に客側に芸まはしあり。主に答へる客人の好意のあらはし方。

うたげは疑ひなく打上げすること。手を揃へて打つて騒ぐ事がうたげ。この場合に主人が見物になり客が芸をする。これを主に、巡の舞と云ふ。巡の舞とは正座の客より下へ廻つて行く舞を云ふ。皆舞を舞つた。それ以前に、家の舞姫、その他が舞つてゐる。その中異例なのは家の中のスピリットを代表した滑稽な舞が行はれる。地方の大きな社の滑稽な舞はそれから出る。その後客側の巡の舞が出る。

皆が一巡して後乱舞になつて皆一緒に去つて外で衣をとつて人となり、褒美を貰つて別れる。

この宴の式が、ずつと近世、今まで伝つて宴会は神事ののうらひ以後の形をとつてゐる。島台は標の山の形でそれが各部に及んで膳部に一々松の枝や造花がついてゐる。島台の形の分化である。島台前に、すはま  の机が出る。そして宴の中心となつてゐる。客はこのまはりに坐す。（以上、小池ノート6）

正客の定らん時には正客は空席にする。この正客は尊者と云ふ。おそらく、まれ人の訳であらう。ところが寺では尊者あり。食堂の中央はあけてゐる。尊者はびんずる尊者の席だと。ひよつとすると食堂の姿が宴席に移つて正客と考へるが寺の風俗は民間の風俗取入れてゐる。民間では神社を宮殿とした。寺は日本在来の異教と妥協してゐる。古い奈良の寺から新しい寺、禪寺に至るまで異教式の日常生活に入り込んでゐる。寺の尊者の席は民間の風俗の入つたものと思ふ。奈良には専ら尊者、ならびに陪賓が呼ばれる。その席で一度火を消すことがある。古く、光孝天皇が藤原基経に見出された。そのわけは、基経の前の肴の鳥の足がない。そこで火を消して式を済ませたからだ。それは後の説明で実は古くより宴会の半に火を消す事があつた。それは、宮廷に於ける藤原氏の位置を説明する話。藤原氏は宮廷より三種神器と同じやうに氏の長者と称するものが伝へるものがある。これを朱器台盤と云ふ。宮廷にも朱器殿がある位である。藤原氏はこれを継がねば氏の長者になれぬ。これは藤原氏が宮廷の祭の宴の時に神をもてなす役をした。天子は主をせねばならぬが客人をせねばならぬ。そこで藤原が中臣代より主の役をした。

氏の上、助を奈良に定つてゐる。しかもその長者を示す朱器台盤が良房にはじまつた説は受け取れぬ。こんな時代には神秘がない。私は良房の時に印象すべき事があつたのであると思つてゐる。後世の朱の杯、膳など、昔風の杯、台であつたのが作りなほした事がある事であらう。客人をあしらふ道具が大切で客を称めるのが藤原氏の主な人の役。宮廷の主をする道具をあづかるのが藤原氏の宮廷に対する一番重い仕事となる。すると大體宮廷の宴には藤原氏が主になつたと推定出来る。なぜ道具が大切かと云ふと、椀貸し淵、椀貸し塚、竜宮からとか、河童が貸すとか云ふ。私は結局竜宮と云ふ地底の富の世界から出て来る。ところが村の祭りの時の道具は嚴重、隠してある。この道具の印象が祭の饗応の話を忘れた後に、竜宮の説明となつた。半分信仰上の事実で半分空想。昔村々に祭りの道具のある神事の重な家で保存した。そこから椀貸し淵の話となつた。話が転々したに違ひない。民間の話を見ても宮廷の宴の風俗と共通点あり。まれ人神、とも神は乱舞して帰る。これが近世宴会のすべの形式のおこり。大嘗祭もそれを残す。私はのおらいと、宴とは同じと考へない。宴は客人側の騒いで帰るものと考へる。大嘗祭のまれ人の式は、供饌奉る式、なほらひの式、うたげの式の三つあり。その間に主客転じた。わからない事が沢山ある。時代時代の合理解がついて変化した。とりわけ平安に固定した大嘗祭の儀式をそのまゝ、神代以来のものと思へられない。もつと変つた、想像出来ない事があると思ふ。平安の固定した事実から推定するとこのことが知れると思ふ。

今度の大嘗祭は結構な有難いものとなるかと思ふ。
その結果はたして何う今後の大嘗祭の二本となるか不明。私と
して考えればかく考へられる。(以上、小池ノート33)